

オリンピックやワールドカップ開催時、各国の国歌や国旗に出会うことが多くありました。支配されていた国から独立したり、内戦後、平和を取り戻した国々の方は、国歌や国旗を感慨深く見上げている姿に心打たれたことでした。

今月は、わが国の国歌や国旗の由来を知り、誇りを持って他国の方に話できるようにになりたいという願いをこめてご紹介します。

② 国歌「君が代」と国旗「日の丸」について

国歌と国旗は、国家の独立と尊厳とを表す象徴です。したがって、世界中のどの国でも、自国の国歌と国旗を大切にするとともに、他国のそれに敬意を示すのが当然の礼儀とされているのです。

国家の祝祭日や公的行事はもちろん、外国の来賓歓迎や国際的な儀式・競技などの機会には、必ず国旗を掲揚し、国歌が演奏され、参会者は起立してこれに敬意を表するのはそのためです。

ちなみにわが国では、平成11年に「国旗・国歌法」が制定され、それまで慣習として認められてきた国家「君が代」、国旗「日の丸」が法律に明記されました。

国歌「君が代」



きみ ちよ やちよ いし いわお こけ

君が代は 千代に八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで

この歌は、小さな石が長い間にたくさん集まり固まって大きな巖となり、されにその巖に苔がむすほどまで、まさしく千年も万年も大君の御代が続き御治世が栄えますように、という意味をこめたお祝いの歌です。

その原歌（もとうた）は、延期の御代（10世紀初め）、最初の勅撰集として編まれた「古今和歌集」巻七に、「詩人しらず」の賀歌「わがきみは・・・」として見えます。これが、平安中期の頃から「わがきみは」が「きみがよは」に読み替えられて世に広まり、中世・近世を通じて、さまざまな所で多くの人々に親しまれてきました。

明治の初め、外交儀礼の必要から国歌の制定を考えた維新政府は、薩摩琵琶歌「蓬莱山」の中で歌われていた「君が代」をその歌詞に選び、軍楽隊教官であった英国人フェントンに作曲を依頼して、明治3年9月8日、我が国初の観兵式に際し、明治天皇の御前で初めて国歌が演奏されました。

しかし、その旋律が日本語になじまないため、10年後、宮内省雅楽部林広守の作曲（編曲：海軍省傭教師エッケルト）による「君が代」が完成し、同13年11月3日の天長節（天皇誕生日）に、宮中で初めて演奏されました。その歌詞と楽譜は次第に広まり、同21年には「大日本礼式」に収めた楽譜が外国に送られ、また同26年には、祝祭日奉唱歌として文部省より告示されました。

それ以来、130年近くにわたり、日本の国歌として奉唱されてきた「君が代」は、その荘重なメロディーが諸外国の人々からも高く評価されています。

国旗「日の丸」



日本の国旗は、法律上は日章旗（にっしょうき）と呼ばれ、日本では古くから、また今日一般的に日の丸と呼ばれる旗です。

国旗及び国歌に関する法律（国旗国歌法）の規定によれば、旗の形は縦が横の3分の2の長方形。日章の直径は縦の5分の3で中心は旗の中心。上下、左右対称で、色地は白色、日章は紅色とされています。

世界の国旗には、それぞれの建国の由来や理想が表されています。たとえば、アメリカ合衆国の星条旗には、独立した当時の13州を示す条線と、現代の合衆国を構成する50州を示す星が描かれています。またフランスの3色の旗には、市民革命の旗印とされた自由・平等・博愛が青・白・赤の3色で示されています。

日本の国旗としての歴史は、聖徳太子が隋の皇帝・煬帝へ、「日出処天子……」で始まる手紙を送っています。また、飛鳥時代末期に国号を「日本」（日ノ本）と命名したところからも、太陽（日の出）を意識しており、「日が昇る」という現象を重視していたことがわかります。

法隆寺の玉虫隋厨子背景の須弥山図に、赤い真円の日象が確認できます。これは、平安時代の密教図像などにも見出される表現であり、大陸から仏教とともにもたらされた意匠であろうと推測されます。

室町時代の勘合貿易や、豊臣秀吉から徳川家光の第3次鎖国令が出される1635年（寛永12年）までの間に行われた朱印船貿易の際に日本の船籍を表すものとして船の船尾に日の丸が掲げられました。また、戦国時代には伊達氏が軍旗・日之丸大龍を用いていました。

1859年（安政6年）、幕府は縦長ののぼり（正確には四半旗）から横長の旗に代えて日章旗を「御国総標」にするという触れ書きを出しました。日章旗が

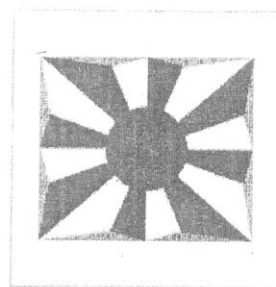
事実上「国旗」としての地位を確立したのはこれが最初です。

日章旗と旭日旗のちがい

日章旗は日の丸ですが、旭日旗（きょくじつき：朝日を図案化した旗で旗の中央部に赤い丸を描き周辺へ放射状で何本も光の線を引いたもの）は、現在、陸上自衛隊で帝国陸軍の軍旗とは意匠を一部変更した八条旭日旗（8条の光線を表現）を「自衛隊旗」としています。



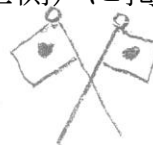
旭日旗(16条の光線)



自衛隊旗(8条)

国旗の掲げ方

国民の祝日や国家の奉祝行事のある日には、家々で国旗を掲げましょう。家庭で門前に掲げる場合は、門内から見て右側（門外からは左側）に掲げ、国旗を2本掲げる場合は並立にするか、差して掲げます。



国旗を掲げる時間は、日の出から日の入りまでとします。

高い建物やバルコニーなどから国旗をたらしして掲げるときは、旗竿を水平または斜めにして出し、旗の端が地面に触れたり、建物の壁に触れないようにします。また、国旗の掲揚、降納に際しては、直立、黙礼あるいは脱帽するなどして敬意を表します。

なお、祝意を表す国旗は、球の部分と旗の間を離さないようにして掲揚しますが、弔意を表す国旗は、球部を黒布でおおい、球部と旗を離れた面に黒布をつけて掲揚します。

当園では、休日保育担当者が祝祭日は国旗を正門の門内から見て右側に掲げることにしています。

しかし、国旗掲揚・降納の際の直立、黙礼はしていなかったことに気付きました。10月の運動会の時、そういう機会があれば、おとながこどもにして見せることも大事かと考えています。

また、国歌については、ほし・すみれ組が冬頃から練習をしています。

堀 侃子